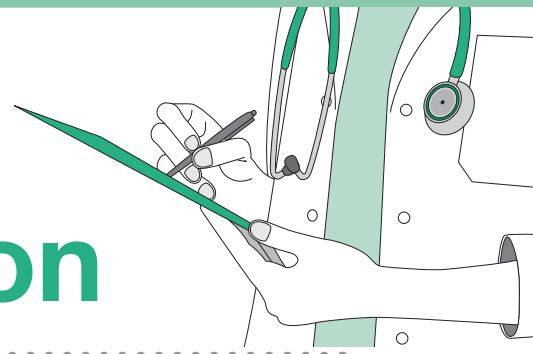


# Clinical Question



## Q4 HPPは永久歯に影響を及ぼすのでしょうか？

回答 仲野和彦

大阪大学大学院歯学研究科小児歯科学 教授

A

歯周組織が脆弱なため永久歯においても動揺が生じたり、自然に脱落したりすることがある。歯周組織だけではなく、歯全体の形成不全が生じる重症例もある。

### 解説

低ホスファターゼ症 (hypophosphatasia : HPP) における歯科所見の代表的なものは「乳歯の早期脱落」であり、わが国の小児歯科学関連のどの教科書にも記載がなされているが、永久歯に関する言及は見当たらない。小児歯科専門医は、一般的に永久歯列が完成する思春期までの患者が対象であるため、その後の診査を行う機会がなかったことが大きな要因であると考えられる。本稿では、HPPの永久歯に対する影響について、最近の知見と関連文献における記述をもとに考えていきたい。

#### 1. 歯限局型などの軽症例における歯科所見

HPPでは、アルカリホスファターゼの低下によってセメント質の形成が不十分になることで、歯の動揺が生じ自然脱落へとつながることがわかっている(図1)。これまでに、歯科を受診したHPPの症例における「歯の早期脱落」に関して全国調査を行った<sup>1)</sup>。その結果、歯科を受診しているのは、歯限局型や小児型などのいわゆる軽症例の患者が多いことが明らかになった。そのうち全体の約7割の症例で乳歯の早期脱落を認めたと、そのほとんどが乳前歯部で生じていた。乳臼歯部や永久歯

において生じない理由として、乳前歯は単根であるが乳臼歯は複根であるため脱落しにくいということが考えられる(図2)。同様に、永久歯であまり生じない理由として、永久歯は乳歯よりも歯根が長いことに起因していると考えられる。一方で、不正咬合により局所的に強い力がかかる症例では、永久歯であっても自然脱落が生じるようである<sup>2)</sup>。

#### 2. 重症例における歯科所見

近年では、HPPにおける医科歯科連携の重要性に関する啓発活動が進展し、重症型の症例も全身状態が落ち着いた時点で、歯科医師が診査する機会が増加してきている。また、酵素補充療法の導入により、これまでは生存自体が困難であった症例の歯科受診も可能になってきている。前述のように、軽症型ではセメント質形成不全による乳歯の動揺や脱落が典型的な所見であるが、周産期型などのいわゆる重症型ではエナメル質や象牙質をはじめ歯根の発育にまで障害が及んでいる症例が認められ<sup>3)</sup>、「歯全体の形成不全」が生じている可能性が推察される。現時点では、分析症例数が少ないため明確に論じることは困難であるが、今後十分に検討していきたいと考えている。